

【研究ノート】

## 明治の双六コレクター — 檜崎海運と「雙六類聚」—

岩 城 紀 子\*

### 目 次

- はじめに—「海運」という蒐集家—  
1. 「雙六類聚」について  
2. 「雙六類聚」の全容  
おわりに

キーワード 双六 根岸党(派) コレクション 幸田露伴

### はじめに—「海運」という蒐集家—

明治の東京を代表する洋風建築といって思い浮かぶひとつに、海運橋の第一国立銀行がある。文明開化を象徴する新しい名所として、銀座煉瓦街と並び、多くの錦絵にも描かれた建物である。その第一国立銀行の対角で、檜崎正三郎(正兵衛)という人物が一軒の紙商を営んでいた(図1・2)。生年は未詳であるが、明治33年(1900)3月20日に40歳で亡くなったと伝えられている。この檜崎という人物、本業は紙商であるが、明治期の蔵書家としてある程度知られた存在であった。3月21日付の大阪朝日新聞には、饗庭篁村の筆とされる「檜崎海運氏逝く」という次のような記事が掲載されている。

海運は文学を作るの人にあらずして、文学に依なる人なりしなり。淡島寒月(愛鶴軒)が、西鶴の紹介者として、露伴紅葉の益友として、名を文場に知られたるが如く、海運は多く世に知られざりしなり。豊芥子が手に篩を持ちて、其業にいそしむ間も、その目は巻帙の上を放たざりしが如く、海運は牙籌をとって、錙銖をだも苟せざる間に於て、群書を涉猟し、美術を愛尚して措かざりしなり。読み得たる所は之を知友の間に披講して、未だ見ざる人あらば千金の珍といへども庫を開いて閲覽せしむ。露伴の如き、太華の如き、此文庫中より得たるもの決して慚しとせず。其文学に依なりしこと斯の如し。頃日病で卒す。惜しむべき哉。氏は通称を奈良屋正三郎といひ、東京日本橋区阪本町なる紙屋の主人なり。

\*当館学芸員

海運は其号にあらねども、家、海運橋に在るを以て、同人の戯れに呼びしが遂に名となりしなり。享年四十。充棟の堆書、また誰が手に繙かれん。<sup>2)</sup>

彼は檜崎正三郎の名よりも、自分の家が海運橋のたもとにあることから、「戯れに」自らを呼んだ「海運」の名で知られた人物であった。この記事を書いたとされる饗庭篁村は、根岸党（根岸派）と呼ばれる文士たちの集まりの中心的存在であった。根岸党は、篁村、森田思軒、幸堂得知を發起人として明治23年（1891）に結成された、「根岸あたりの閑静な地に居をさだめた文士や画家が自然に集まって遊んだ<sup>3)</sup>」、いわば遊び仲間の会合であった。前述の3人のほか、須藤南翠、高橋太華、関根只好、宮崎三味、幸田露伴、久保田米僊、富岡永洗とともに、檜崎海運もそのメンバーの一人であった。根岸党の活動＝「遊び」は、「二日旅行」と「能美努計無尽」の二つからなっていた。「二日旅行」は、毎月一回行われた一泊二日の旅行で、これらの旅の記録はメンバーらによって「草鞋記程」「月ヶ瀬紀行」などの紀行文として残されている。<sup>4)</sup>「能美努計無尽」は、要するに酒盛りのことで、こちらも頻繁に催されていたようだ。海運は、これらの旅行や会合にかなり参加していたようで、先に挙げた「草鞋記程」にも、参加者の一人として名があげられている。この紀行文には、同じく旅に参加していた富岡永洗が描いた参加者らの挿し絵が付されているが、海運の姿もその中に見ることができる。この根岸党の活動を通して、海運は明治期に活躍した文化人らとの交流を深めていたようで、種々の随筆や日記に彼の名がしばしば登場してくる。

例えば露伴は、昭和7年（1932）12月24日の夜に開かれた座談会で次のように海運について語っている。この座談会は、雑誌『文藝春秋』の企画で行われたものであり、翌年の2月号に「幸田露伴氏に物を訊く座談会」として掲載された。

千葉 先生は西鶴物などはどの位でお買ひになりました。

露伴 私などはあまり買はない。買ったのは他のハタケのもので、軟いものは淡島（寒月）などに借りて読んだんです。淡島、それから海運橋の檜崎、これなどはさういふ本が好きでしたネ。

（中略）

小島 海運橋の檜崎といふのはどういふ人です。

露伴 紙屋さんです。洒落た人で、その時分の浮世新聞などには、時々奈良茂大尽なんて書かれたりしました。金も費ふし遊びもしたので。その人は私等とは丸で違ふんです、商売が紙屋さんですから。たゞ好事で、おもしろみ本位で本を買つて蒐めてゐたんです。<sup>5)</sup>（後略）

篁村や露伴の伝えるところから、本業の傍ら、黄表紙や洒落本など、江戸のいわゆる軟文学

を趣味で集め、それを交流のある文学者たちに貸していた、という海運の人物像をかいま見ることができる。さらにその人物像を伝えるエピソードは、三村竹清の「本之話」や、林若樹の「若樹随筆」といった随筆に残されている。<sup>6)</sup> いずれも内田魯庵からの伝聞ということで紹介されており、内容に大きな差違はない。それによると、内田は「好事家檜崎の家にハ余度々訪れ」ており、親交があったようだ。内田自身、草稿の類など明治25、6年頃まで収集していたが、ある日檜崎のもとを訪れた際に、「馬琴の手紙を買ひたる話をしたるに、我が家にも馬琴の手紙あれど、始末がつかねば、ほしくばよきものを引ぬきて持帰り給へとて、出せしを見れば、大凡一と抱へほどくご縄にてからげあり」、その様子を見て「最早骨折りて集むる勇氣無くなり」、古物の収集をやめるきっかけとなった。また、海運には「森羅万象」と題する貼込帖が数々あり、「短冊などは、高尾薄雲等の名姑を年代別にして貼込」んだすばらしい物で、「その滓ならん束にしたるもの戸棚の中ニ沢山ありしか其中ニさへ面白きもの沢山あ」ったという。彼のコレクションは、広重の名所絵や、様々な錦絵、はては春本と幅広く、特に黄表紙は300冊近くあり、いずれの表紙も戯作者の紋散らしの紙を用い、作者毎に色をかえるなど、「紙は御手のものなればなるべし」と魯庵が評するように、紙商ならではの装丁を施していたようだ。<sup>7)</sup> この黄表紙のコレクションは、森銑三によれば、その後加賀豊三郎の所蔵となった、という。森は、「加賀翠溪翁とその蒐書」で、「しかし加賀翁の蒐書として最も誇るべきものは、何といつても千部を超えている黄表紙に止めを刺さう。これは海運橋の檜崎氏の蔵書が纏まつて這入つているのであり、上野図書館その他の黄表紙と較べると、保存のよい本に、更に手入れがしてあつて、それだけに讀易い。」と、質・量ともに類をみないコレクションとして高く評価している。<sup>8)</sup> この海運の黄表紙コレクションは、加賀の蔵書が都立日比谷図書館に移る際、ともに同図書館の所蔵となり、現在東京都立中央図書館において加賀文庫として閲覧・公開されている。ちなみに海運橋のたもとにあった檜崎の家の前を通りかかると、土蔵の窓から積み重ねた本箱が見えていたという。

さて、この檜崎海運、先に述べたように、明治33年に他界したが、彼の蔵書のその後については、林若樹が次のような事情を伝えている。

檜崎氏の家ニハ餘程善きものありしなるへし。去年【割註・明治三十六年】頃此家のものハ高橋太華山人や幸堂得知翁の手ニて諸方ニ売られしか、金額にして六千円位になりしといふ。二束三文ニうりてうった金額なれば、其面白きものたる想像することを得へし。<sup>9)</sup>

彼の膨大な蔵書は、次代に継承されることなく、死後わずか3年で、おそらくは遺族の希望によって売りに出され、諸方に散逸してしまったようだ。先述したように、彼のコレクションのうち、黄表紙については、加賀豊三郎の手を経て都立中央図書館に現存しているが、その他に彼がどのような物をどのように蒐集していたのか、今となっては知るすべもない。「高尾薄雲

等」の「短冊」、「馬琴の手紙」、「黄表紙」、「広重の景色絵」、「其他の錦絵」、「春本」、「黙阿弥下絵」、「大津絵の三尊仏」。魯庵や若樹、竹清らの残した逸話から想像するに、彼の興味の対象は、もっぱら江戸の庶民が享受していた文化に根ざしていた物、具体的には版本や摺物・錦絵といった一枚物、馬琴などの江戸の文人に関わる物に向けられていたようで、漢籍や古文書といったような学問的関心に基づく蔵書ではなかったようだ。

こうした海運のコレクションの傾向を、具体的に知ることの出来る資料が、本稿で紹介する「雙六類聚」である。彼は、双六のコレクターでもあった。海運の黄表紙のコレクションが、一旦、加賀豊三郎という他人の手に渡って、そのコレクションの一部として現存していることを考えると、そこから海運自身の蒐集の意図をくみ取るとは困難であろう。ところがこの「雙六類聚」の場合、海運自身の手によってまとめられた状態そのまま、まとまった資料群として完全な形で残されているのである。本稿では、この「雙六類聚」を手掛かりとしてとりあげたい。この資料の分析を通して、明治という新しい時代に、「旧い」時代の物に固執した、樺崎海運という一蒐集家の存在と、その思いのなにかしらを、そこから見いだすことができるはずである。

## 1. 「雙六類聚」について

「雙六類聚」は、東京国立博物館が現在所蔵している、全部で70点の絵双六が張り込まれた貼込帖である。縦43.4センチ、横30.8センチ、厚さ4.6センチと、かなり大きな帖である。貼り込まれた絵双六は、木板摺画のみならず、肉筆のものも含まれている。

表紙は宝珠文の布張りで、墨書で「雙六類聚」と記された題箋が貼られており、左下には、帝室博物館の所蔵票3点が貼付されている(図3-1)。この所蔵票のひとつには、「明治三十六年」「購入」という記載を認めることができ、明治36年(1903)に購入によって帝室博物館に入ったことをうかがわせている(図3-2)<sup>10)</sup>。貼り込まれている絵双六の多くは、帖の片面あるいは見開きに収まるように化粧断ちをした状態で貼り込まれているが、それを越える大きさのものは、裏打ちを施した上で、見開きに貼り込まれ、さらに折り畳んだ状態で帖におさめられている。また、表紙・裏表紙をくるんでいる布の文様とあわせたとであろう、裏打ちには宝珠が一面に散らされた紙が使われている。

さて、貼込帖の冒頭には、勝海舟による讚が寄せられ、巻末には仮名垣魯文の跋文が添えられている(図4・5)。この跋文は、「雙六類聚」の伝来などについて、手がかりとなる唯一の資料である。

雙六盤の木肌太きは持運びの便ならずとて、紙に摸しものせしより中興、これに絵を加へ、様々の種類も出来て、刊行の物世に多く、双六の名は盤上の厚きより紙面の薄きに奪はれ、



あら玉の年立返る且、貴賤の童子これを翫ばぬはなく、然ば往時小学の盛んならぬ頃、仏法浄土雙六の図に未来を説き、官職補任双六の譜に現世を示し、嬉戯玩弄の中おのづから婦幼を諭し、雅童を導くの案内となしより、人生の道中雙六行廻り、二百年の昔を今にとしとしの新版、此種類の旧きを棄ず、青丹よしなら崎の若主人、紙鬻ぐ家のよすが、此反古どもの世に散紊れたるを取集め、部類を分ちて一帙宛に製されしを、余一日勝海舟翁の許に携へて見参らしに、年経し反古の好事の手に斯く修復して蘇生りしは、故人柳亭が還魂紙の材料となれる物ぞと仰ありしをその儘に後に記す

仏骨庵主仮名垣魯文述

この跋文によると、魯文がこの貼込帖を携えて海舟のもとを訪れたとある。冒頭にある海舟の讚は、その時に識したものであろう。讚には「丁亥仲春」とあるので、明治20年の2月ごろにあたる。「海舟日記」によると、この年の1月と3月に、魯文は海舟のもとを訪れている<sup>11)</sup>。この頃の魯文の訪問が、この帖を持参してのことであったと考えられ、そしてそれは、おそらくこの帖を仕立てた人物の依頼によってなされたものと推察される。魯文は、その人物について、「旧きを棄ず、青丹よしなら崎の若主人、紙鬻ぐ家のよすが、此反古どもの世に散紊れたるを取集め、部類を分ちて一帙宛に製されし」と紹介している。「紙鬻ぐ家」、つまり紙商を営んでいる「なら崎の若主人」、この人物こそ、先に紹介した檜崎海運、その人なのである。

ところで、この「雙六類聚」については、すでに複数の研究者によって、紹介されてきた。管見の限りだが、昭和4（1929）年に刊行された『日本風俗史講座』に収められた有馬敏四郎の「遊戯」が初めてと思われる。この論考の中で、有馬は絵双六の歴史を述べる部分の冒頭で、「繪双六の種類は甚だ多く、博物館所蔵のものみでも六十八程もあつてそれについて一々述べる事は出来ないが、その名稱を以下に列挙して見よう。」とし、続いて計62点の双六の名称を挙げている。また、本論中および口絵で、合わせて9点の双六を写真図版として掲載している。有馬はここでは「帝室博物館所蔵の双六」とするばかりで、「雙六類聚」の名は一度も登場しない。しかし、紹介されている双六の名称および図版から、あきらかに「雙六類聚」に収められた絵双六と判断して間違いない。

「雙六類聚」を「雙六類聚」として、最初に詳しく紹介したのが、関忠夫の「「雙六類聚」雑考」<sup>12)</sup>であろう。関は論考の冒頭で「ここでは、その中にみられる画工の名を拾って若干の知見を加え、つぎに数点について板行年代を考察し、後考の参考としたい」と述べているとおり、「雙六類聚」の全体像の紹介を目途とはしていない。だが、そこで取り上げた個々の双六については、特に画工と制作年代に重点をおいてかなり詳細に検討されている。

両氏とも、「雙六類聚」に貼り込まれた絵双六の考証に焦点をあてており、この貼込帖の制作者、成立年代といったことには言及していない。貼込帖の存在は、比較的早くから知られていたのだが、それがだれの手によるものであったか、久しく明らかにされず、またさほどの関心

も向けられずにいたのである。

本稿では、この「雙六類聚」という画帖の全体像の紹介も、目的の一つとしているので、当然貼り込まれた一点一点の双六がどのようなものであったか、についても個々に考察を加えていく。ただし、その際には、従来のように個々の双六の考証に重点を置くことはせずにおきたい。ここに貼り込まれた70点の双六は、明治の一コレクター、檜崎海運という人物によって蒐集され、貼込帖という形態にまとめ上げられた。その作業の過程では、当然コレクターである海運自身の意図が色濃く反映していると考えられる。ここでは、その「コレクターの意図」に着目したい。どのような双六がどのような配列で、この帖にまとめられているか、その点を分析することで、逆にコレクターの意図を浮かび上がらせてみたい。

## 2. 「雙六類聚」の全容

「類聚」とは、小学館の『日本国語大辞典』によれば、「同じ種類の事柄を集めること。また、その集めたもの」という意である。例えば菅原道真が編纂した平安前期の史書『類聚国史』は、六国史の記事を、「神祇」「歳時」などの項目ごとに分類し、さらに年代順に排列したものである。平安中期の法制書である『類聚三代格』も、三代格の記事を同じように項目ごとに分類したものである。

海運はこの貼込帖に「雙六類聚」の名を与えている。題名に「類聚」との語を使用していることは、ここに貼り込まれた双六が、何らかの基準によって分類・配列されているということの意味していると考えられる。つまり海運はまったく無作為にこれら70点の双六を貼り込んでいったのではなく、一定の分類基準に沿って、自ら所蔵する双六を分類し、ここに「類聚」とした、と考えられるのである。

本稿末の表は、「雙六類聚」に貼り込まれた70点の双六を、その配列順に一覧にしたものである。以下、この表の番号に沿って説明していく。

冒頭には、先述のとおり、勝海舟によって識された次のような讚がある。

浮雲時

事改処

月此心

明

丁亥仲春

海舟

この讚に続き、次の丁から絵双六が登場するが、まず1 [浄土双六] 2 [官職双六] 3 [御大名出世双六] の3点が並ぶ。<sup>13)</sup>最初の [浄土双六] は、極彩色で描かれた、肉筆のかなり大き

なものであり、作者・年代など、制作時の状況を知るための情報はいっさい見受けられない。2の「官職双六」と3の「御大名出世双六」は、木板墨摺のものである。この2点は、宮中や幕府での昇進の過程をテーマにした、いわゆる「官位双六」と呼ばれるものにあたる。官位双六は、浄土双六とともに、絵双六の歴史上、初期の形であるとの通説が江戸時代以来あり、これらに属する3点の双六が帖の冒頭に貼り込まれているということは、初期の形式をまずは示しておきたい、との海運の意図の現れであろう。特に1の「浄土双六」は、極彩色の肉筆本であり(図6)、この貼込帖中最も華やかな一点である。海運としては巻頭を飾るに相応しい、自慢の一点であったのであろう。

4から6には、浄土双六に属する3点が並ぶ。いずれも木板墨摺のものである(図7)。一般に、浄土双六は万治・寛文年間に庶民の遊戯として普及したと考えられており<sup>14)</sup>、1の豪華な浄土双六に対して、これら墨摺のものは浄土双六の普及の過程を見る上で興味深い資料である。

7「古今大将双六」以下、10までの4点の双六は、画面構成など形式的に非常に似通っている(図8・9)。作者名や板元名がなく、制作年代は特定できないが、絵柄から見て元禄前後のものと推察される。注目したいのは、この4点すべてが、数字を目とする賽ではなく、「南無分身諸仏」という漢字を目とする賽を使用することを前提に作られているという点である。これはあきらかに浄土双六の流れをくむものであり、海運もおそらくはこの点に着目して、これら4点をまとめて、初期の形式としてここに貼り込んだのだろう。

次の2点は、道中双六にあたるものである。11は西村屋与八を板元に、安永4年(1775)の正月に出された、東海道五十三次を巡る道中双六である。12は、11より30年ほど古い、寛保3年(1743)の刊記を持つ(図10)。こちらは、木曾道中をテーマとしている。絵双六の流行は、だいたい元禄期を境に、浄土双六から道中双六に移行していく。道中双六は、その後現在に至るまで、絵双六のいわば「定番」として定着していくが、ここに挙げられた2点は、その道中双六に該当するもののうち、初期に作られた物である。浄土双六と、その流れをくむ4点の絵双六に次いで、海運が初期の道中双六を配列したことは、浄土双六から道中双六へ、という絵双六の歴史の流れを意識してのことであろう。

13から16の4点には、絵師や板元名の名が見られ、制作時期も、正徳から安永ごろと、比較的限られた時期と推定できるものが並べられている。13の「諸商人雙六」(図11)は、上がりの部分に描かれた衝立にある隠し落款から、元禄期に活躍した浮世絵師の一人である石川流宣の作品であることが分かる。振り出しに「南無分身諸仏」の文字があることから、先述した7から10の双六と同様、比較的初期のものに分類される。なお、振り出しの「南無分身諸仏」の文字の下には、一から六までの数字が朱書きで書き加えられている。いつの段階か、この双六を手にした人物が、分かりやすいように数字に置き換えたのだろう。13は墨板に筆彩が施され、各マスの描写も細部にわたっており、丁寧なつくりとの印象をもつが、あとの3点も、同様に筆彩が施されたり、墨一色でもかなり丁寧な仕上がりになっており、この時期の双六としては

比較的凝った内容のものがここに集められていると言えよう。

対照的に、17以降、31までの15点は、制作時期は前の4点と近く、享保期を中心としているが、いずれも墨一色で摺られた、どちらかというとな簡素な双六である。近藤助五郎清春の作品3点が見られるとともに（図12・13<sup>15)</sup>）、当時の芝居狂言を題材にした双六（図14）がまとめて貼り込まれている。

さて、ここまでで、貼り込まれた双六の約半数を紹介したことになる。貼込帖全体を見通すと、実はここを境に、双六の並べ方に変化が見られる。前半部分が、大まかにいって、絵双六の歴史的な過程に沿って、分類・配列されているのに対して、後半部分は、概ね寛政期以降、文化から天保期を中心に制作された双六が、描かれている主題別に分類されて貼り込まれている。以下、後半部分について具体的に見ていこう。

32から40は、遊女や遊郭、またそうした場で興じられた芸事や大道芸をテーマとしている双六である。34「新板北國廓中契情道中装雙六」（図15）は、大門口を振り出しに、江戸の新吉原での廓遊びの様子を描いたものである。また、37の「いろはたんかどうけすごろく」は、いろは四十八文字を頭文字としたいろは歌をめぐる双六であるが、各マスには遊女の様々な姿態が描かれている。36「新板大通諸芸すご六」は、俄や長唄、地口など、主に座敷芸として行われた諸芸を取りあげており、遊郭とのつながりが強い内容となっているが、35「大坂下りおでこでんすてでこてんてん双六」（図16）のような、辻や路上で見られた大道芸を扱った双六や、40「新板十二ヶ月なぞづくしまり歌双六」といった、座敷芸として人気のあった鞠歌そのものをテーマとした双六もここに含まれて分類されている。吉原の廓文化と、それを取り巻く諸芸を分類の基準とした配列であろう。

次の4点、41から44までは、旅や名所にまつわる双六になる。41「新板名所付五十三次道中双六」は、おなじみの東海道五十三次を描いた道中双六であるが、他の3点はいずれも江戸の名所を描いたものである。歌川国直によって描かれた44（図17）は、欠損によって題名がわからないのだが、「両国の涼」「亀戸の藤」「巢鴨の菊」など、四季折々の江戸の名所を紹介しており、上がりは「上野花」となっている。膳を囲む3人の男性が描かれた振り出しには蜀山人・太田南畝の狂歌がしるされている。

45以降、54までの10点は、歌舞伎の役者や芝居狂言、黄表紙を主題としているものが並べられている。ここでは特に、墨屋吉兵衛や美濃屋平兵衛といった、京都の板元から出されたものが中心を成している（図18・19）。題材となっている演目から、文化年間に作られたと思われるものが多く、いわゆる「合羽摺」と呼ばれる技法のものがほとんどである。

ここに続く55から68までは、広告双六に該当するものになる。江戸では、新装開店や正月の初売りなどの際に、景物として得意客にさまざまな配り物をしてしたが、双六もそうした物の一つであった。戯作者であると同時に、日本橋の薬屋の主でもあった式亭三馬は、自店の商品を巧みに盛り込んだ双六を自ら制作し、宣伝に役立てていた。61はそうした三馬店の広告双六



のうちの一点である(図20)。また、59・60にも、作者名として三馬の名が見られるが、これらは三馬が他の店からの依頼を受けて作った広告双六である。他にも瀧亭鯉丈といった戯作者の名を作者名に持つものも含まれており、文化・文政期の文人たちが、コピーライターのような活動をしていたことが伺われ、興味深い。

さて、ここに貼り込まれた14点のうち、11点はあきらかに宣伝・広告を目的として作られた双六と見てよいのだが、64・65・66の3点だけは、少々趣を異にしている。64・65(図21)の2点は、江ノ島を描き、66は江戸の名所を取りあげているということから考えると、先の41から44が貼り込まれていたあたり、名所を扱った双六として分類されるのが自然であるように思える。海運がこれらをここに置いた真の意図は、計り知れないのであるが、俳諧師をはじめ、柳亭種彦などの文人や、葛飾北斎、柴田是真、南溟、華山といった著名な絵師の名が見られることから、文人に関わる物としてここに置いた可能性が一つ考えられる。だがそれよりも、これらの双六が彼ら仲間内で、配り物として私製で作られていたと考えられることから、広告双六同様、非売の限定品であったという視点でここにまとめられた、と考えるほうがよいであろう。

ともかく主たる性格として「広告」という機能に着目して配列されたこれら14点の双六の、一番最後に置かれたのは68「諸国紙類大安売」(図22)と名づけられた双六である。海運の本業が紙商であったことを思い起こすと、なるほど、納得がいく。

さて、いよいよ最後の2点である。これまで貼り込まれた双六は、いずれも時代は異なろうとも、日本で作られたものであった。貼込帖の最後に登場したのは、中国の双六である(図23・24)。17～18世紀に制作されたと見られるこの版画については、太田南畝が『南畝莠言』に記しており、模写図(図25)も同時に掲載されている。

近頃水晶宮といへるものをえたり。西遊記に似たるもの也。ふり出しを起馬といふ。こまを馬子といへばなり。今其図をこゝにうつして、児女の目をよろこばしむ。又骨牌図といふもあり。桃花塙中桂正興造としるせり。繁ければ略す。<sup>16)</sup>

海運の「雙六類聚」はここで終わる。この後には、先に全文を紹介した仮名垣魯文による跋文が記され、それをもって帖を閉じることとなる。

以上、「雙六類聚」の全体像について、これらの双六を集めた人物である海運が、どのような意図をもって貼込帖に仕立てたのか、に着目して述べてきた。ここでもう一度振り返って、この帖の構成の特徴をまとめておこう。

前 半 部 (年 代 順)	讀			後 半 部 ( 分 類 順)	32~40	諸芸
	1~3	口絵			41~44	道中・名所
	4~6	浄土双六			45~54	芝居・役者
	7~10	初期絵双六			55~68	広告
	11~12	初期道中双六			69~70	外来(中国)
	13~31	享保期絵双六	13~16		豪華版	
			17~31	普及版		

海運はこの「雙六類聚」を作るにあたり、まず前半部において、絵双六が遊戯として庶民層に定着していくまでの歴史的な過程を示そうとしたのだろう。浄土双六がまず流行し、その衰退と共に双六の多様化がみられるようになり、道中双六や野郎双六が出現、享保期ごろにはかなり普及・定着していた、という、彼の絵双六の歴史観は、文化・文政期を中心に、柳亭種彦や喜多村信節、山崎美成といった文人らによって、さかんに語られた絵双六についての考証に基づくものだろう。<sup>17)</sup> 後半部は、それを引き継ぐ形で、遊戯として定着した江戸時代後期以降、いかに双六が多様化して発展し、さらに普及したかを、種類別に分類して示したのだろう。「雙六類聚」は、蒐集家・檜崎海運が気紛れに自分のコレクションのうちから「お気に入り」を集めて美しく帖に仕立てた、というような性格のものではない。海運なりに、双六に対する考証を加え、それに基づいた分類基準を設け、編纂されたものであった。ゆえに、題名にはそれに相応しく、「類聚」の文字が冠されているのである。

### おわりに

内田魯庵は、海運について、もうひとつ興味深いエピソードを残している。

ツイ二十年ほど前まで日本橋の海運橋の袂に檜屋といふ老舗の紙屋があつた。此の檜屋の主人は其頃マダ若かつたが、先代からの江戸の通人で、文人墨客と廣く交際していた。或時椿岳がフラリと来て、主人に向つて云ふには、俺の處へ畫を頼みに来るものも多いが、紙ばつかりでトンと絹を持つて來ない、怎うだい、一つ絹に描かして呉ないかと。そんなら羽織の胴裏にでも描いて貰ひませうと、檜屋の主人は早速白羽二重を取寄せて頼んだ。椿岳は常から弱輩のくせに通人顔する檜屋が気に入らなかつた乎、或は羽織の胴裏といふのが癢に觸つた乎して、例の泥繪具で一氣呵成に地獄変相の図を描いた。頗る見事な出来だつたので檜屋の主人も大に喜んで、早速此畫を胴裏として羽織を仕立てて着ると、故意乎、偶然乎、膠が利かなかつたと見えて、繪具がバツタリ着物に附いて了つた。<sup>18)</sup>

幕末から明治にかけて活躍した画家、淡島椿岳と海運との関わりを伝える話である。海運の

生年は、没年から逆算して、だいたい万延元年（1860）ごろと考えられる。物心つくころに、維新があり、明治を迎えた世代である。新しい知識、新しい物が世の中にあふれ、一方で日常のいたるところに江戸が色濃く残っていた、そうした時代に育ち、アイデンティティを確立した海運が、これほどまでに「江戸」に傾注した生活を送っていたのは、「檜屋の先代は江戸の十人衆と云はれた幕府の御用達（材木商）で通人番付の閑脇に載った大通人、先代の血をうけた当代も通人」で、先代も好事で蒐集家であったという、家庭環境に起因するところ大であろう。<sup>19)</sup> それでも、実際に「江戸」の時代に、すでに絵師として活動していた椿岳から見ると、「若輩のくせに通人顔する檜屋」のことは、江戸を知らずに江戸を気取る、「気にいらぬ若造」に思えたのかもしれない。

海運がその晩年まで関わりを持った根岸党について、塩谷賛は次のように評している。

この集まりはどこかで江戸につながっている。篁村は露伴より十二歳上、得知は二十四歳上で三人とも卯の年だったが、露伴のほかは幕末の江戸の空気を吸って知っているのである。露伴は吸うことは吸ったが一二歳のときだから何も覚えてはいない。三人を代表として説明したのだが、得知を最年長者とする集りのこの人たちはこの三人のどれかに属していた。維新の新しいものに惹かれるよりも旧幕の古いものを懐かしんだ。今から見れば明治をいい時代だったように私どもは思うが、明治にいた根岸党の人たちには明治は江戸っ子を追い出していなかものが勝手にふるまった時代なのである。根岸党は生き残った江戸っ子の集りでもあった。<sup>20)</sup>

新しい方へ、新しい方へと、時代が忙しく動いて行く中で、古い時代のものたちに囲まれて短い生涯を終えたこの檜崎海運という一コレクターの存在は、明治の近代をある意味で象徴している第一国立銀行が彼の居所を見下ろすようにあった、ということに合わせて考えたとき、一方でまた象徴的に「明治」という時代を示しているようにも思えるのである。

#### 【註】

1) 紙商としての檜崎については、明治期の商人録に以下のような記述が認められる。

- ・『東京商人録』明治13年刊（横山錦柵・編『東京商人録』1987年 湖北社）  
紙商之部 日本橋区  
「坂本町一番地 檜崎正兵衛」
- ・『日本全国商工人名録』明治25年刊  
東京府武蔵国（東京市）和洋紙  
「和洋紙商 并野引帳簿類 日本橋区坂本町一 奈良屋 檜崎正兵衛」
- ・『大日本紳士鑑』明治28年刊  
「日本橋区坂本町 檜崎正兵衛」
- ・『日本全国商工人名録』明治31年刊

東京府武蔵国（東京市日本橋区） 学校用品、紙問屋

●紙問屋

「和洋紙問屋 奈良屋 檜崎正兵衛 阪本町一」

彼の没後にあたる、明治37年に刊行された『東京明覧』上巻では、第13章商工業紙類の項目に「全印刷 製本 全〔日本橋〕区坂本町一（奈良屋） 檜崎庄兵衛」という記述が見られる。代替わりとともに印刷業に転業したのかもしれない。

なお、『旧幕引継書目録 諸問屋名前帳』（国立国会図書館 1978年 湖北社）には、両替商の十一番組に「奈良屋正兵衛（慶応二年三月廿五日番組利右衛門天秤譲受加入、坂本町一丁目儀兵衛地借）」、また地漉紙仲買として「奈良屋庄兵衛（坂本町一丁目儀兵衛地借）」という記述があり、海運の先代であると考えられる。

- 2) 「大阪朝日新聞」明治33年3月21日号掲載。なお、肥田皓三「蔵書家檜崎海運」（肥田皓三『日本書誌学大系55 上方学藝史叢放』青裳堂書店 昭和63年 所収）を参照のこと。
- 3) 塩谷賛『幸田露伴 上』（中公文庫 昭和52年）、180頁。なお、根岸党については、塩谷賛「根岸党記事」（『露伴と遊び』創樹社 昭和47年）、中込重明「根岸派と洒落ル会」（『日本文学誌要』63号 法政大学国文学会 平成13年 所収）等を参照。
- 4) 「草鞋記程」（『明治紀行文学集』明治文学全集第94巻 昭和49年 筑摩書房 所収）参照。なお、野田宇太郎は、「明治の紀行文学」（明治文学全集第94巻付録 月報 所載）で、月ヶ瀬の旅館、騎鶴楼に残された宿帳を紹介しており、この中に根岸党の一行として訪れた「檜崎正兵衛」の名があることを記している。
- 5) 「幸田露伴氏に物を訊く座談会」（『露伴全集』第41巻 昭和55年 岩波書店）。なお、座談会には質問者として、千葉亀雄、小島政二郎、菊地寛、鈴木氏享、佐佐木茂索の5名が出席している。
- 6) 三村竹清「本之話」（『日本書誌学大系23（2） 三村竹清集 二』昭和57年 青裳堂書店）。林若樹「若樹隨筆」（『日本書誌学大系29 若樹隨筆』昭和58年 青裳堂書店）。
- 7) これらのエピソードについては、魯庵自身も、以下のような記述を残している。

海運橋の檜崎氏を尋ねた時、森羅萬象と題した反古帖十數帖を見て、出雲や海音のものがバタ／＼貼付けてあつたりするのを見ると、我々の持つてる反古帖などは馬鹿々々しくなる。手紙の咄が出た時に、アナタは馬琴の手帄をお持ちですかと聞かれて、イヤ持つていませぬといふと、戸棚からコモ縄で絡げた一と束の手紙を出して、ドレでも二三本お持ちなさいといふ。斯う澤山あつては貰う氣もしないが、折角の好意だから一本貰つて來たは來たが、シカシ珍重する氣になれんで誰かにやつて了つた。檜崎君の文庫を覗いて見てから、モウ何も彼も蒐める氣がしなかつた。

（内田魯庵「魯庵隨筆」『内田魯庵全集』別巻所収）

また、明治29年3月9日付けの彼の日記には「又檜崎を訪ふ。世分ほどにして辭す。」という記述もあり、たびたび訪問していた様子が伺われる。

- 8) 森銚三「加賀翠溪翁とその蒐書」『森銚三著作集』第11巻 昭和46年 中央公論社
- 9) 林若樹「若樹隨筆」『日本書誌学大系29 若樹隨筆』昭和58年 青裳堂書店
- 10) 前節であげた若樹の記録によると、海運の残した蔵書類は明治36年頃に売却された、と伝えており、「雙六類聚」の所蔵票の年と一致してくる。
- 11) 『勝海舟全集』第21巻（勁草書房 1973年）所収。
- 12) 関忠夫「『雙六類聚』雑考」（『MUSEUM』230号 東京国立博物館 1970年）
- 13) この3点の双六には、いずれも題名にあたる表記がない。それぞれの名称は筆者による仮称である。なお、以降、□ で表記された名称は、同様に筆者による仮称である。
- 14) 浄土双六については、拙稿「浄土双六考」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第1号 1995年 所収）を参照。
- 15) このうち、化物を描いた「なんけんけれどもばけ物双六」については、拙稿「化物と遊ぶーなんけん



- んけれどもばけ物双六—」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第5号 2000年 所収）を参照
- 16) 『南畝莠言』（『日本随筆大成』第二期24 吉川弘文館 昭和50年）
  - 17) 柳亭種彦の考証随筆である『還魂紙料』は、日本における絵双六の歴史を、最初にまとまった形で紹介したものといつてよいであろう。文政9年（1826）に板行されたこの著書のなかで、種彦は俳諧や噺本、歌舞伎などの文芸作品を取りあげ、そこから「実証的」に絵双六の歴史を叙述している。文化・文政期、江戸の文人たちの間では、古版の絵双六に対する関心が高かったようで、山崎美成が主宰した耽奇会でも、西原俊江の所蔵する絵双六が展覧された。種彦の考証は、彼らに少なからず影響を与えており、喜多村信節『嬉遊笑覧』や山崎美成『博戯犀照』など、文化・文政期に出された考証随筆における絵双六に関する記述からも、それを読みとることができる。
  - 18) 内田魯庵『思ひ出す人々』のうち「淡島椿岳」（『内田魯庵全集』第4巻 ゆまに書房 昭和60年）
  - 19) 前掲註18の巻末に掲載された「解説」では、「内田家所蔵の『思ひ出す人々』には、七ページについて念入りな書き込みがある。」として、全文を紹介しているが、ここにあげた部分は、「淡島椿岳」の章に魯庵自身が書き込んだもの、とされている部分である。ただし、前註1）で紹介したとおり、海運の先代が幕末期にはすでに紙商を営んでいたことは確かであるがここで述べられているような江戸幕府の御用達商人であったという説については、現時点では確認できない。
  - 20) 前註3）『幸田露伴 上』180～181頁。ちなみに、露伴は慶応3年（1867）の生まれで、海運より7才ほど年下である。

#### 【付記】

本稿の執筆にあたり、川添裕氏、横山泰子氏に多くのご教示を得た。記して感謝申し上げる。

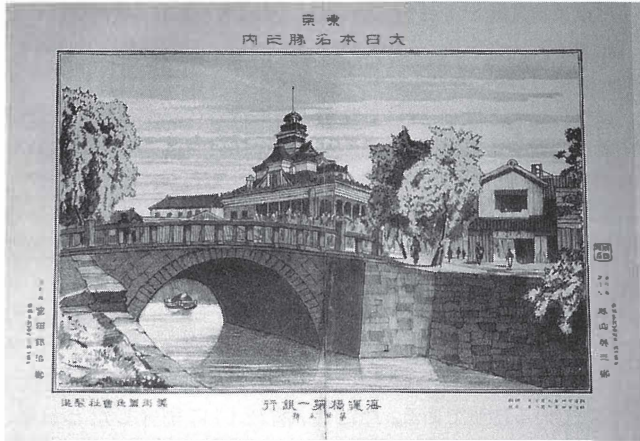


図1  
東京 大日本名勝之内 海運橋第一  
銀行 第廿五號  
勝山英三郎／画・発行 明治24年  
(1891) 館蔵87102394

地図から確認できる第一国立銀行と坂本町一丁目の位置関係から、図1に描かれた、橋詰めに建つ暖簾のある白い商家が海運の店である可能性が高い。

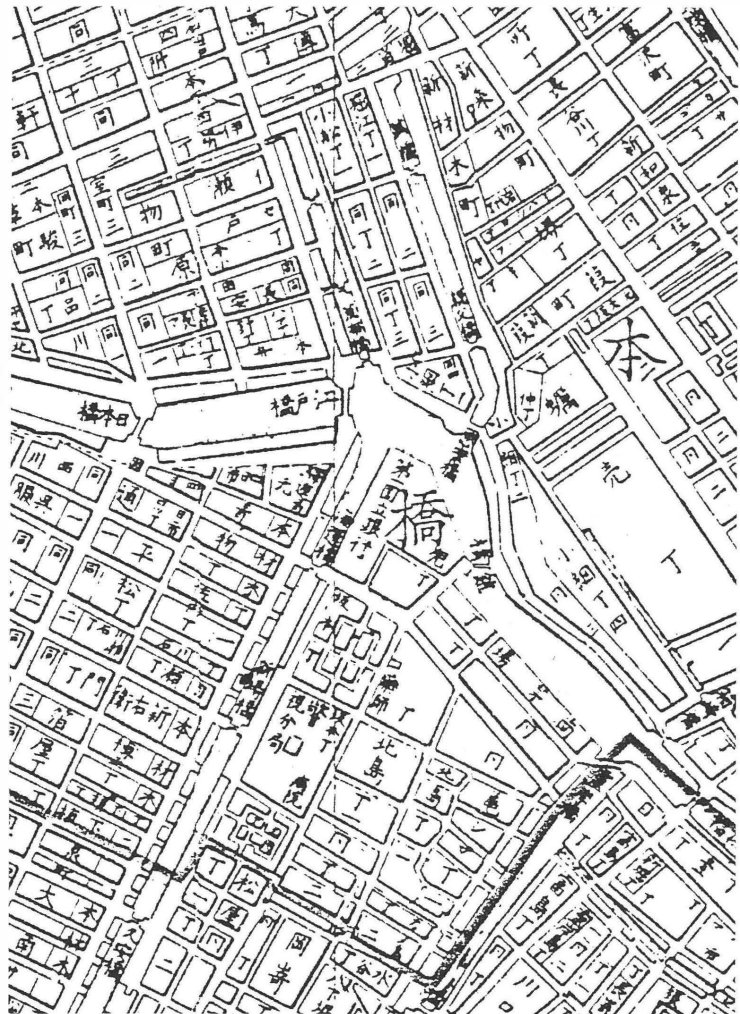


図2  
実測東京全図  
明治12年 (1879)  
『日本地図選集』(人文社)  
所収



図3-1

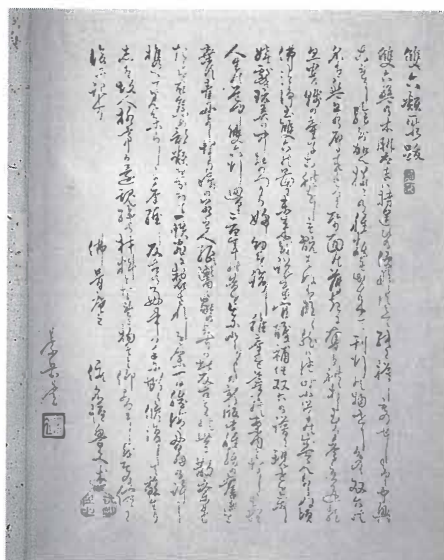


図4



図3-2

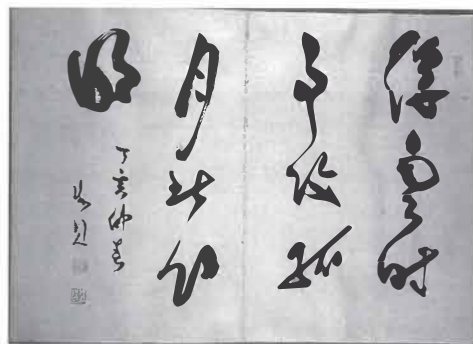


図5



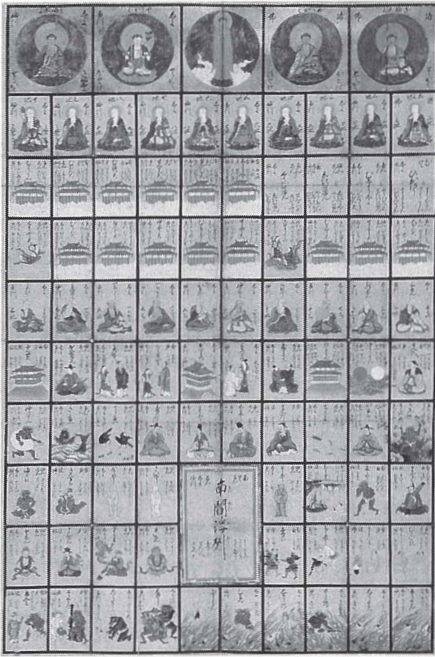


図6 1 [浄土双六]



図8 7 古今大将双六

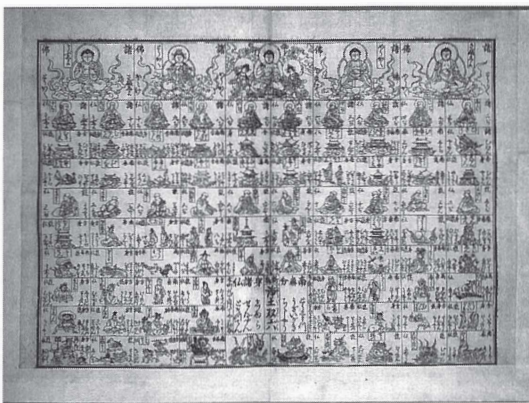


図7 5 新板浄土双六

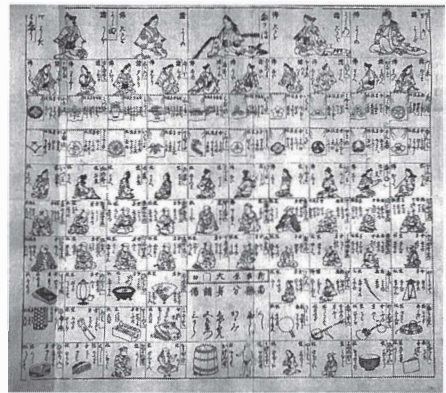


図9 10 新吉原大門口



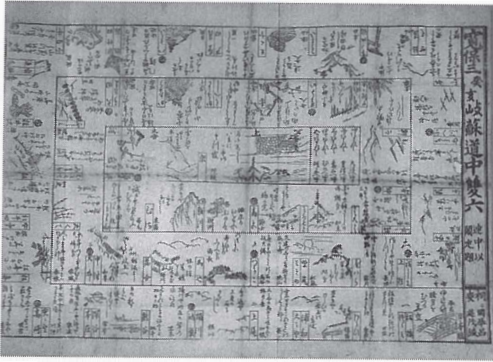


図10 12 寛保三癸亥岐蘇道中雙六



図12 22 ぞうでもおかしきぢぐち双六

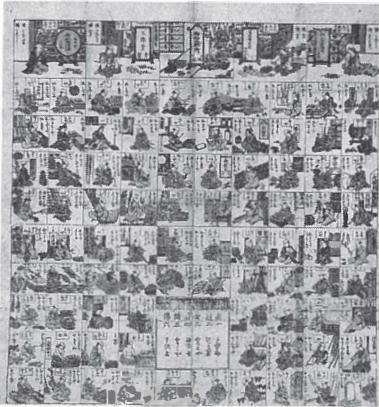


図11 13 諸商人雙六

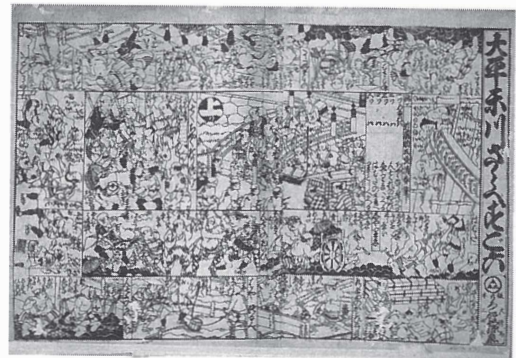


図13 24 大平楽川ざらへすご六



図14 25 新板京みやげ 金村やおさん たたみや伊八すごろく

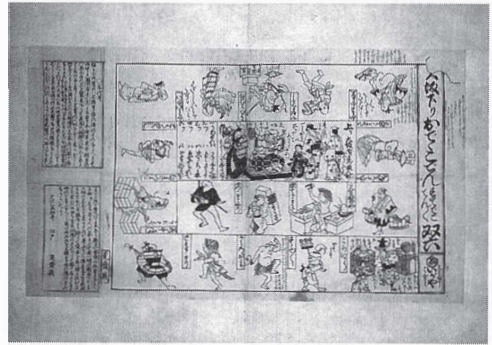


図16 35 大坂下りおででこでんすてでこてんてん双六



図15 34 新板北國廊中契情道中装雙六

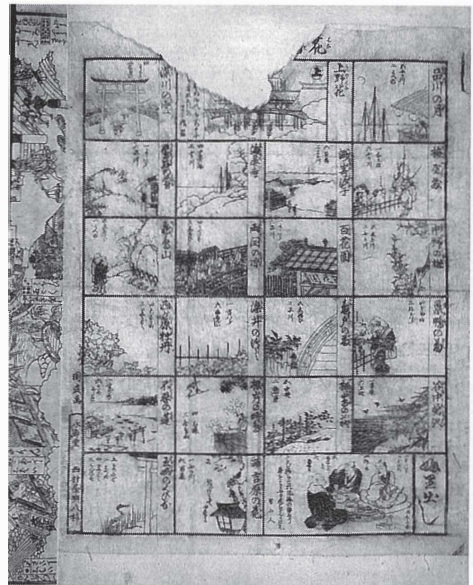


図17 44 花 [以下欠損]



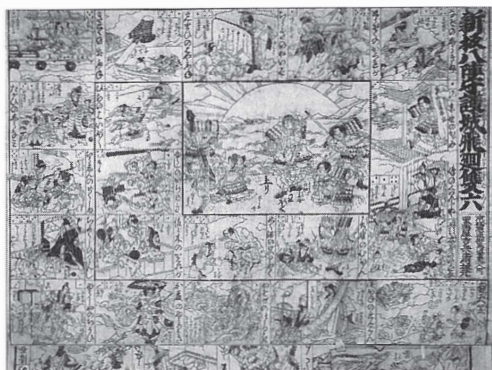


図18 50 新板八陣守護城飛廻雙六

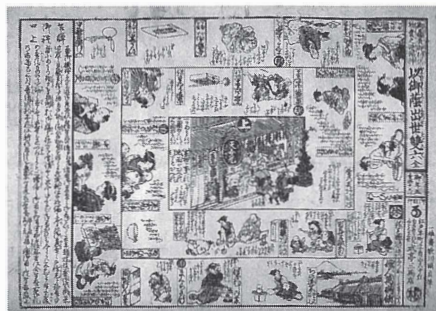


図20 61 御眞眞御利益初賣之迎福神以御蔭出世雙六全



図19 52 辰新板虚空太郎  
武者修行嘶出世飛雙六



図21 65 鎌倉江ノ嶋大山新板往来雙六

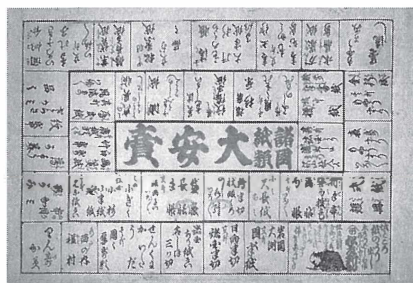


図22 68 諸國紙類大安賣

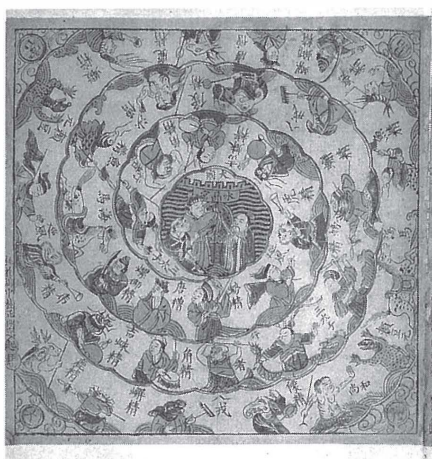


図24 70 大開水晶宮

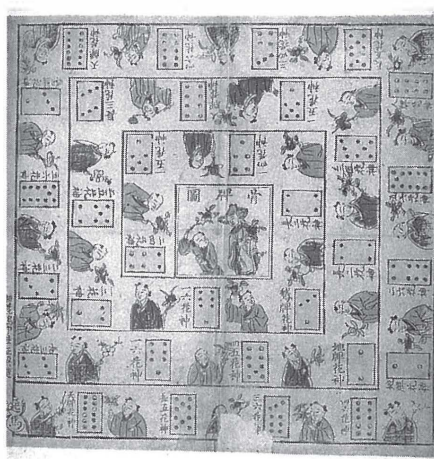


図23 69 骨牌図



図25

『南畝莠言』卷1 (太田南畝／著 文宝亭／編 丸屋甚助／版 文化14年／刊) 館蔵 86200796



明治の双六コレクター 一橋崎海運と「雙六類聚」

番号	資	料	名	絵師・作者名	版	元	名	形態	年代	タテ	ヨコ	備	考
1	讀			勝 船舟				墨書	明治20年				
2	[浄土双六]				江戸芝神明前 術/版	名山隠吉兵 衛/版		紙本着色	江戸前期	1224	826		
3	[官職大名出陣双六]							木板墨刷	江戸前期	610	822		
4	[妖怪浄土双六]			稲生七右衛門画(墨 刷)				木板墨刷	江戸前期	688	492		
5	新版浄土双六							紙摺入り		728	534		
6	慶東前連之圖							木板墨刷	江戸前期	412	556		
7	古今大将双六							木板墨刷	江戸期	771	734		
8	源氏武者双六							木板墨刷	江戸前期	638	532		
9	ばけ物大せり合すご六							木板墨刷	江戸前期	607	687		
10	新吉原大門口							木板墨刷	江戸前期	590	685		
11	[西村屋版東海道五十三次双六]							紙摺繪	安永4年1月	597	867		[安永乙未春新撰]
12	寛保三亥夜蘇道中雙六			岡琴呂・酒茂綾ノ撰				木板墨刷	寛保3年	516	711		[連中以蘭定題]「桐二岡琴呂 奕 酒茂綾」寛保2年成立「蘇の夜」(俳諧)著者の琴呂(きんろ)と同一人物か。
13	諸節人雙六			石川流直/画				木板墨刷(筆彩)	貞享〜正徳期	630	605		絵師石川流直は、元禄期の主要な絵師の一人。作画期は貞享〜正徳期。
14	八算教語録			中谷又兵衛/画 夏月堂元冠/撰				木板墨刷(筆彩)	江戸中期	600	562		
15	歌仙雙六			谷久和/画				木板墨刷	安永期	590	404		絵師谷久和は、安永期を作画期とする絵師。
16	教訓庭遊中雙六							木板墨刷	江戸後期	449	611		[享保以後江戸出版書目]にある以下の記述と同版か〔(明和)四正月 教訓庭遊双六 西ノ内二枚摺 作者静庵房 版元流石 竹川藤兵衛〕
17	新版福神双六							木板墨刷	万治〜享和期	440	305		
18	おとしもわれぬとちうたい双六							木板墨刷	正徳〜寛政期	307	440		
19	なんけんけんねどもばけ物双六							木板墨刷	享保10正月吉日	295	440		版元并簡屋は并簡屋左衛門か、百鬼夜行を描いたもの
20	かのえさるかうしん待すご六							木板墨刷	[元文5年]	277	426		版元は并簡屋三右衛門か制作年代は、版元活版期のうち庚申にあたるのが元文5年であったためそこから推定
21	ちやんちやんわらいすご六							木板墨刷	享保期	307	440		版元藤田の作例に享保後明頃の作品有り
22	ぞうでもおかしきちぐち双六							木板墨刷	享保期	307	440		版元は相模屋与兵衛(湯島天神女坂下)
23	重方ねづみ大まつり双六							木板墨刷	享保〜延享期	307	440		版元は江戸野町の中嶋屋伊左衛門
24	大平楽川さらへすご六							木板墨刷	享保期	307	440		
25	新版京みやげ金付やおさんたみ や伊八さころく							木板墨刷	[享保20年]	285	440		享保20年大坂・中山新九郎屋、江戸・中村屋で上演された「睦月連理玉椿」(むつしましきんり)のたまつばき)に取材した双六
26	さかのしやか弾りせう双六							木板墨刷	江戸後期	285	440		
27	新版すかはら当り双六							木板墨刷	[寛延〜宝暦期]	307	440		「草津伝手摺墨」に取材した双六 江戸での歌舞伎としての初演は、延享4年5月
28	中村富十郎三年たつたら飯の字が 付ませう双六							木板墨刷	寛保元年11月頃	307	435		富十郎・新九郎・菊之丞の姓名から、それぞれ寛保元年1月に江戸で上演された芝居と推定。 鎌倉首書教諭(寛保元江戸中村屋親助世)さころも・八橋六郎「妾娘女業平」(寛保元年江戸・中村屋親助世)君左衛門(女房)ら業
29	おけんのかね福引なご屋双六							木板墨刷	[享保期]	307	440		版元は相模屋与兵衛(湯島天神女坂下)
30	竹田大からくり双六							木板墨刷	[宝暦期]	307	438		
31	新版隠里福神隊入双六							木板墨刷	享保期	307	430		版元は、芝神明前陣屋
32	江戸名所東海道五十三次車中双六 そふかいなぶし							木板墨刷	江戸後期	293	413		
33	魂盤雙増大通雙六							木板墨刷	寛延〜寛政期	307	440		版元は、湯島切通しの西村屋伝兵衛と推定

34	新版北國陣中夜前通中雙六 大坂下りおでこでんすてでこて んで心双六	勝川春英/画	木版墨刷	明和〜寛政期	320	482	原資料 版元は江戸市河野伊勢屋(元後醍醐天皇)寛文年間「年代考」あり 原資料の制作年代を正徳享保年間と推定 朱書多数あり
35	新版大洞語藝すこ六	北波/版	木版墨刷	江戸後期	302	415	
36	新版大洞語藝すこ六	北波/版	木版墨刷	江戸後期	302	415	
37	いろはたんかどうけすこく	角	木版墨刷	江戸後期	296	388	
38	新版まごぶしきご六		木版墨刷	江戸後期	423	307	
39	しんほんにひがた八百八けすこ ろく		木版墨刷	江戸後期	252	405	
40	新版十二ヶ月なぞづくしまり馬双 六		木版墨刷	江戸後期	298	426	版元は、通油町伊勢屋金兵衛(享保〜宝暦年間)
41	新版名所付五十三次道中双六	浪斎筆	墨摺繪	享保〜宝暦年間 文化〜弘化年間 (画家)	307	440	
42	新版江戶御飛双六		木版墨刷	享保〜天保期	307	440	版元は、京都松原通新町西入北側美濃屋平兵衛(享保〜天保年間)か
43	新版江戶御飛双六		木版墨刷	享保〜天保期	375	295	振り出しは蜀山人(大田南畝)の狂歌有 絵師国直の作画期は文化9〜天保年間
44	花[以下欠損]	歌川国直/画	木版墨刷	文化9〜天保期	375	295	四方歌垣草履(鹿部郡草履)の口上有り 狂歌作者。戯作者名は恋川野町。寛政6年四方姓を譲られる。絵師国直の作画期は、寛政後期〜文政前期
45	新版高直通中雙六	柳々居成斎/画	木版(多色)	寛政後期〜文政前 享保期	307	440	上がりの使者は、市田十郎・坂田半五郎か 享保4〜5年ころか
46	新版俊者双六		木版墨刷部分 著色	享保期	307	440	
47	江戸しまん娘名寄双六見立評判		木版墨刷	江戸後期	332	450	版木 藤川山吾は大坂の芝居小屋「加々見山郭寫本」は、安永9年12月藤川座で上演(歌舞 後年表)
48	加々見山郭寫本 鹿本 藤川山吾		木版墨刷	安永期	307	440	版元の墨屋重兵衛は、「浮世絵大百科事典」にある「墨吉」か 享和・文化頃の合羽間の版元
49	新版忠臣蔵七段目義経陣門飛雙六		木版墨刷	享和〜文化期	307	440	版元の墨屋重兵衛は、「浮世絵大百科事典」にある「墨吉」か 享和・文化頃の合羽間の版元「八 陣守徳木」は、文化9年中江戸都仲宗達屋で初演。(歌舞後年表)
50	新版八陣守徳城飛雙六		木版墨刷	文化期	307	440	版元の墨屋重兵衛は、「浮世絵大百科事典」にある「墨吉」か 享和・文化頃の合羽間の版元「八 陣守徳木」は、文化9年中江戸都仲宗達屋で初演。(歌舞後年表)
51	新版北朝切狂言飛雙六		木版墨刷	文化期	307	440	題材となったのは、切狂言「鹿小松子日の浦」「四段千鶴職」と見られる。文化7年11月の京 都で、北の菊屋座で「鹿小松」、南の亀谷座で「千鶴職」が上演。(歌舞後年表)
52	辰新旅塵空太郎武者修行斬出世飛 雙六	歌川豊秀/画	木版墨刷	文化期	307	440	版元美濃屋重兵衛は、松野軒、京都の版元 享保〜天保年間松野武川豊秀は、上方の絵師、 読本の挿絵と作品あり、作画期は、文化〜天保年間。種本と見られる。「虚妄太郎武者修行業師」 は、享和12年刊の黄表紙。昔相家巻瀧人/作 歌川豊弘/画 和泉屋市兵衛/版 直近の辰年 は文化5年
53	新版徳兵衛隠懸懸軌跡飛雙六		木版多色刷	享和期	307	440	題材となつてゐるのは、「新編隠懸懸軌跡」と見られる。同狂言は、享和11年9月京都亀谷座で初 演(歌舞後年表)
54	中村芝翫双六	五波亭国貞/画	新勢堂/版	文政期			絵師五波亭国貞は、初代歌川国貞、五波亭の画号は文化8年頃〜天保末頃使用か、中村芝翫は、 4世中村歌右衛門四か、文政8年芝翫假名(〜天保4年)、文政12年11月、はじめは龍頭となる。 上がりの狂歌から、顔頭となつたことをごつての双六か。
55	〔広告双六 紅白粉問屋 玉屋〕 御ひき御とり 御得意福神雙 六	本藤亭翠平/述 目目屋九兵衛/刊	木版墨刷	江戸後期	300	412	
56	御ひき御とり 御得意福神雙 六	徳松馬道連新館院地内くし師 扇次郎/刊	木版墨刷	江戸後期	305	410	
57	春興 諸國器山露雙六	箱町三日廻戸物店西村榮 藏/刊 實直不計	木版多色刷	天保中期〜弘化期	400	295	絵師清英一の作画期は天保中期〜弘化年間 瀬戸物店西村栄藏の取物か
58	宝の山松繁栄雙六	一勇斎四方画 滑次郎	墨摺繪	江戸時代後期	317	440	商店の景物小間物問屋 鼎屋重兵衛
59	以御得意亭栄大酒薬中雙六	歌川国貞/画 式亭 三馬/作	木版墨刷	文化期	302	425	「のし 御生玉赤物には不仕條」寶藤屋山御橋の河内屋平次郎の年頭取物 絵師は初代歌 川国貞 国貞の画号は、文化4年〜天保14年
60	以御得意亭昌来賢福神雙六	湯島切通板下西宮仙助/刊	木版墨刷	文化期	306	410	「けいぶつらうり」には不仕條 絵師は初代歌川国貞 国貞の画号は、文化4年〜天保14年頭 飾は文化9年頃か式亭三馬(安永3〜文政5 1776-1822)は、戯作者。楽屋も開店。自店の景 物として作られた双六。
61	御墨御利益初買之御福神以御盛 出世雙六 全	江戸本町二丁目北かか中程 しろきのうらんくすりみせ 式亭三馬店/刊	木版墨刷	文化期	302	415	「のし 御生玉赤物には不仕條 絵師は初代歌川国貞 国貞の画号は、文化4年〜天保14年一推 飾は文化9年頃か式亭三馬(安永3〜文政5 1776-1822)は、戯作者。楽屋も開店。自店の景 物として作られた双六。

番号	資料名	絵師・作者名	版元名	形態	年代	タテ	ヨコ	備考
62	菓子流行御島思来賀福福神雙六	歌川国貞/画 錦文/作	浅草南門内本店橋原振津 大塚藤原鐵江/刊	木版墨刷	文化～天保期	307	416	「のし 御歳玉 売物には不仕條 絵師は初代歌川国貞 国貞の画号は、文化元年～天保14年 作者錦文錦文（?～天保12～1841） 戯作者
63	[菓子双六]	星の屋北居/述	尾張町吉丁目かなや可撰/ 刊	木版多色刷	江戸後期	352	463	菓子屋 加奈屋可撰の宣伝双六
64	鶏米嶋文車	南沢他/画 銀河/撰	由空庵	木版多色刷	[文化期]	490	745	和歌・俳語を画に配して有る。句は慈鳥、文友、玄河、銀河、その他 南洲、華山、南洲、小春その他
65	鎌倉江ノ島大山新板往来雙六	前北斎為一/画 身柳彦/撰	柳 西村屋康八・鶴屋喜右エ 門・上州屋重盛	木版多色刷	天保2年正月	611	440	日本橋から鎌倉、江ノ島、大山を巡り、長津田や三軒茶屋を通って再び日本橋へ戻る 参考 文政末田生器「鎌倉江ノ島の島大山新板往来双六 姿」[北斎研究]第18号鶴屋重八「双六に見る旅案内」鎌倉、江ノ島、大山、新板往来雙六を中心として」[神奈川県立博物館研究報告]第12号
66	華古代美	柴屋眞画 晋永機選	宝山堂/版	錦絵	明治8年	408	536	「紀元一千五百三十五年乙亥」(明治8年・1875年) 改印は、明治7年12月 絵師は桑田屋其
67	新製口取御菓子雙六	国友/画	新吉原竹村伊勢大塚/刊	木版墨刷	文化～天保期	305	421	選者は、華米明治の俳人・鶴屋水鏡 絵師は、初代歌川国安か 作時期文化～天保年間
68	蒲団紙額大安寶		松屋新助/刊	木版2色刷	江戸後期	304	357	「太左エ御門ぼし北語西へ入北がわ 松屋新助」
69	骨牌図	桃花鶴中桂正興造		中国版画	17～18世紀	305	307	
70	大開水晶高	桃花鶴中桂正興/作		木版多色刷	17～18世紀	302	300	
	跋文	仮名屋魯文/著		墨書	明治20年			

